

小説 「 帰 ら ざ る 友 」

藤田 稔

昭和18年(1943)4月、愛媛県立東峰中学校から松岡耕作が旧制松山高等学校(略して松高)文科へ、藤本信也が同理科に入学した。

松岡耕作は文学を志している。中学1年の時、ふと自宅の庭の隅にある土蔵の中に入ってみると、大正時代に出版された雑誌「婦人の友」(1922)の付録雑誌が目についた。

それはやや黄ばんでかびくさい臭いがしていた。そこには久米正雄の小説「破船」が掲載されていた。何気なく読みはじめたが、松岡はいつしかこの小説にひきこまれていた。

大正5年(1916)24歳の時に「新思潮」に発表した「鼻」が夏目漱石に激賞され、いきなり文壇の寵児となった芥川龍之介の華々しいデビューにくらべて、同世代の久米(東京大学文学部同級生)は目立たない存在であった。というよりも久米にはどうしても芥川のような才知にあふれた絢爛たる小説が書けなかった。久米は大きい鈍重ともいえる身体をよじって苦悩した。

それに比べて芥川の華麗さはどうであろう。大正4年(1915)に世界的な名作といわれる「羅生門」を発表している。大正7年(1918)「蜘蛛の糸」、「地獄変」、大正11年(1922)「トロッコ」などを矢継ぎ早に発表して不動の地位を確立していたのである。

久米が文壇に打ってでるには自己の体験を赤裸々に書くしかなかった。それはあまりにも恐ろしいテーマであった。

神をも恐れぬ仕業、すなはち、恩師夏目漱石の令嬢、夏目筆子との恋愛と失恋の経緯を詳しく世の中に発表することであった。原稿用紙にペンをたたきつけるようにして書かれたであろう「破船」を読み進むうちに、松岡耕作は涙が溢れて止まらなかった。

陽が傾き、蔵の中はいつしか暗くなっていた。

火のような文学への渴望がわき上がってきた。松岡耕作は文学の道に進みたいと思った。

死にかえても文学を一生の仕事にしたいと思った。

一方、藤本信也は建築家を目指している。文科と理科にわかれてはいても二人の友情は固く結ばれていた。松岡はせっせと短編小説を書いては藤本に批評をもとめた。藤本はいつも必死に一字一句もらさず読んで率直な感想を述べた。こうして二人は人間性を高めあっていたのである。

その年の秋、松高文芸部主催の短編小説コンクールに応募した松岡耕作

の「夜の航路」が見事一位に入選したのである。松岡耕作の「夜の航路」のあらすじは次のとおりである。

松岡耕作が大阪大学の先輩に会うために松山港から大阪に向かう関西汽船にのりこんだのは春の宵のころだった。ふとした縁で美しい独身女性、福原淳子と知り合う。広いダイニングルームで夕食をともにして語っているうちに、彼女も文学少女であることを知る。デッキで美しい星空を眺めながら文学や人生の話で弾んだ。松岡は今までに読んだ本の中で最も感動したのはロマン・ローラン作のジャン・クリストフであると言いきり是非読むようにすすめた。福原淳子は最も好きな作家は夏目漱石で「こころ」「三四郎」「それから」「門」などを読破して感激したと語った。

松岡は現在、ドイツ語の教科書はゲーテ作の「若きウエルテルの悩み」であり、その概要を解説した。文学の話で盛り上がり、尽きることは無かった。松岡はいつしか福原淳子に恋心を抱くようになった。大阪で下船したとき、福原淳子は名残惜しそうに、「松岡先生、今後もお会いして色々教えてください。先生の連絡先を教えてくださいませんか」と言った。松岡は松高生で前途はわからない、戦時中なので明日のことすらわからない。

福原淳子とおつきあいするのは、かえって彼女を苦しめる結果になるのではないかと思い、断腸の思いで返事をしなかった。福原淳子の目はうるみ、しばらく松岡耕作をみつめていたが、やがて街なかへと消えていった。

藤本は松岡を下宿に招いてスキヤキをして祝福した。「松岡、見事入選おめでとう」と藤本は心から友を祝福した。「ダンケ・シェーン、いつも君の率直な批評が役にたったよ。文学は、いや、すべての芸術に共通していることだが、感動が無いと駄目だね。感動の無い絵画、書、彫刻、文学は無用の長物だ。芸術の創造の原動力は感動だ。そして出来上がったものに人は感動する。そこにはプロもアマも無い。」

藤本は建築家を志し、松岡は作家をめざした。太平洋戦争の戦局は急に傾いてきた。

昭和18年(1943)秋、東条英機内閣によって大学、専門学校在学中の20歳以上の文科系学徒の徴兵令が可決され、若い学徒は容赦なく戦場に駆り出されていった。

昭和19年(1944)12月のことであった。松岡耕作は文科の指導教官に呼ばれた。

「松岡君、君に徴兵令状がきた。しかし、絶対に死ぬなよ。生きて帰るんだぞ。必ず帰還して君の好きな文学をやるんだ。教官は毎日君のことを祈っているからな。」

「はい、私は絶対に戦死なんかしません。這ってでも帰って参ります。私

が一生を捧げるのは文学と心に決めていますから」

藤本信也が学徒徴兵令の実態を調べたところ、このたびの徴兵令は、文科の学生にのみ適用され、医・理・工系の理科の学生は国家有用のため適用しないが、戦局が重大になるといずれば理科の学生にも適用されると書いてあった。藤本信也は啞然とした。「松岡、すまん、必ず生きて帰って来てくれ」藤本は心で詫びた。松岡耕作の壮行会が道後温泉の「鮎屋（ふなや）」で開かれ、藤本は夜を徹して飲んで語り明かした。「藤本、色々世話になったな。これは僕が書きためた原稿だ。これを君に預けて置く。僕に万一のことがあったら僕の遺書として処分してくれないか。」「何を言うんだ松岡、必ず生きて帰るんだ。君は作家になって世の中の人に感動と希望を与えるんだ。君の命は君のものであると同時に世の中の人たちのものなんだよ。戦争は必ず終わる。平和な世は必ず来る。君は死んではいけない人間なんだよ」二人は道後温泉の朝湯にはいった。肉体も心もいやされ、解き放たれる気がした。

昭和20年（1945）2月、南方に向かう輸送船が撃沈され松岡耕作の訃報が届いた。

「松岡、なぜ死んだのだ、なぜ……なぜ……」藤本信也はひとり城山に登り慟哭した。かつて松岡と並んで座ったベンチに腰をおろした。

「瀬戸の海は優しいね。ほら、あんなに遠くに霞んでみえるよ」松岡の明るい声が聞こえたような気がした。

「松岡」思わず藤本は松岡の肩に手をかけようとして腕を伸ばした。

しかし、そこには虚空しかなかった。

松岡の一途な美しい瞳、藤本は今始めて、どんなにか、この友を愛していたかを悟った。

そして、文科の学徒は次々と召集されてゆき、その多くは2度と教室に姿を見せることは無かった。それでも、昭和20年（1945）4月の松高文科の人気は高く、競争率は5.5倍にも達したのである。

石油分析化学研究所 研究所長
工学博士（大阪大学） 技術士（化学部門）
藤田 稔

2025年 1月15日